

[課題演習報告書]

健康課題に関する自己指導能力を育成する指導の研究 —食育ガイダンスと食育カウンセリングを通して—

門 司 隆 宏

Takahiro MONJI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻生徒指導・教育相談リーダーコース
遠賀町立浅木小学校

(2022年1月12日受理)

在籍校では、学力や体力と相関している肥満傾向及び朝食欠食傾向児童の割合が全国平均を上回っており、健康課題を抱える児童への指導や新たな健康課題をもつ児童を生まないための予防的な取組の充実が問題となっていた。そこで、本研究は、学力や体力の土台となる健康課題に関する自己指導能力の育成を目指し、児童が自主的・実践的な学びを促進する食に関する指導を学級活動(2)「エ 食育の観点をふまえた学校給食と望ましい食習慣の形成」を研究領域として、その指導の在り方を検討した。さらに、このような指導を在籍校で一般化するために、報告者が栄養教諭に教科等の指導における食に関する指導のコンサルテーションを行い、栄養教諭を中心とした校内食育推進体制の充実を図った。その結果、児童が健康課題に関する行動目標を自己理解に基づいて意思決定したり、実践したりすることで自己指導能力の向上が見られた。

キーワード：自己指導能力，食に関する指導，学級活動(2)，食育ガイダンス，食育カウンセリング
栄養教諭

1 研究主題についての説明

(1) 主題設定の理由

ア 在籍校の実態から

文部科学省やスポーツ庁は、食に関する課題と学力や体力低下との関係について、「肥満である児童生徒は、体力の合計点が低い傾向がみられることや朝食を毎日食べる児童生徒は、体力の合計点が高い」ことや「朝食を食べる子供ほど、学力調査の平均正答率が高い傾向にある」ことを指摘している。在籍校においても、肥満傾向及び朝食欠食傾向の児童が全国平均より高く、食に関する健康課題を抱える児童は増加傾向にあり教育課題となっている。このような、健康課題を抱える児童の増加は、学習面や生活面における学校不適応の増加にもつながることが予測される。

以上のことから、在籍校の教育課題を解決するとともに、児童の学力と体力を支える土台として本研究を位置づけ、健康課題に関する自己指導能力を育成するための指導の在り方やシステムづくりについて研究することは意義があると考えた。

イ 社会の要請から

『食に関する指導の手引 - 第二次改訂版 - (文部科学省, 2019)』(以下, 手引)には、生活習慣病と食習慣の関係が指摘されている。また、子供の食育を積極的に推進することの重要性も示されている。このような児童生徒の食に関する課題の解決に向け、国は、第3次食育推進基本計画を策定し取り組んできた。その結果、朝食を欠食する子供の割合や生活習慣病の予防のために、適正体重の維持や減塩等に気をつけた食生活を実践する国民の割合が目標値の達成に至っていないなどの評価を行っており、その改善に向けた第4次食育推進基本計画(農林水産省, 2021)の策定に向けた取り組みが進んでいる。この新基本計画では、これまでの取組に加え、17の目標と169のターゲットからなるSDGs(持続可能な開発目標)の考え方を踏まえ、食育により社会全体で連携・協力して、持続可能な食育システムを構築することを方針としている。また、コロナ禍における新しい生活様式は、子供たちの学校生活に大きな影響を及ぼすとともに、一人一人が主体的に感染拡大防止

に努めるなどの高い健康意識が求められる。このような状況において、児童一人一人には、より一層自らの健康課題に気付き、自分なりの方法で解決し学校適応を促進しようとする自主的・実践的な態度の育成が求められる。そのためには、学校においても、新基本計画に沿った新たな視点を加えて積極的に食に関する指導を推進し、自己指導能力を育成していく重要性が高まってきていると言える。

その指導に当たって小学校、中学校学習指導要領には、食育の推進に踏まえ、体育科（保健体育科）、家庭科（技術家庭科）及び特別活動の時間はもとより、各教科道徳科、外国語活動及び総合的な学習の時間等、学校教育活動全体を通じて食育を推進することが示されている。また、そのための指導については、小学校学習指導要領第6章の3の2の(3)で「主に集団場面で必要な指導や援助を行うガイダンスと、個々の児童の多様な実態を踏まえ、一人一人が抱える課題に個別に対応した指導を行うカウンセリング（教育相談を含む。）の双方の趣旨を踏まえて指導を行うこと。」と示されている。

以上のことから、今後は次世代を担う児童に対して、学校が中心となり食に関する指導の推進を図っていくことが重要である。その際の指導に関しては、集団での授業場面と個別に対応した支援の充実が求められている。

(2) 研究主題の意味

主題の「健康課題に関する自己指導能力」とは、自己の健康課題を解決するために、より良い解決方法を意思決定したり、ある一定期間実践したりして自らの行動を変容させようとする能力である。本研究では、一人一人の児童が直面する食に関する課題を自らの意思決定により行動変容させる指導を行うことを通して、児童の自己指導能力の育成と学校適応を促進させることを目指す。そのため、本研究では、自己指導能力の育成を特質とする特別活動の学級活動(2)「エ 食育の観点をふまえた学校給食と望ましい食習慣の形成」(以下、学活(2)-エ)を研究領域とする。

(3) 研究副題の意味

副題の「食育」とは、食に関する資質・能力等を、児童が発達の段階に応じて総合的に身に付けることができるように学校教育全体で取り組む教育活動のことである。食育で学ぶことは、食育の6つの視点（①食の重要性、②心身の健康、③食品を選択する能力、④感謝の心、⑤社会性、⑥食文化）である。「食育ガイダンス」とは、食育の6つ

の視点を特別活動の学活(2)-エで学級全体に行う指導のことである。また、「食育カウンセリング」とは、食育ガイダンスで意思決定した「自己の課題解決のための行動目標」の達成に向けて実践する過程と振り返りの活動場面で行う個別の関わりと捉える。

(4) 研究の目的

本研究は、在籍校児童の食に関する課題を解決及び予防する上で効果的なガイダンス及びカウンセリングとしての食に関する指導の在り方を究明することを通して、食に関する自己指導能力の育成を図り、子供の学校適応を促進することを目標とする。

そのために、予備研究として、6カ年間の発達の段階に応じて、食に関する指導題材一覧（以下、題材一覧）を作成する。研究Ⅰでは、在籍校第4学年を対象に学活(2)-エのガイダンスについて試行する。その際、主に集団の場面における効果的な食育ガイダンスの在り方を検証する。研究Ⅱでは、主に実践場面において、子供一人一人の目標の達成状況に応じた効果的な指導について第3学年を対象に検証する。さらに、研究Ⅲでは、栄養教諭を中心とした校内食育推進の充実するために報告者が栄養教諭にコンサルテーションを実施する。

2 予備研究

(1) 目的

意図的・計画的に食に関する指導を実施することができるよう、発達段階に応じた食に関する指導題材一覧を作成する。

(2) 研究方法

本研究の研究領域である学級活動(2)（以下、学活(2)）の特質について、杉田(2017)は「教師の意図的・計画的な指導」と述べている。これは、学活(2)が当該学年の指導だけでなく、小学校6年間を見据えた系統的な指導計画を作成し、切れ目なく少しずつ継続して指導をやり続けていくことの必要性を表している。そこで、在籍校の学級活動の年間指導計画を見直し、食に関する指導について発達段階に応じて整理し、題材一覧を作成した。

(3) 実践の具体的実際

食に関する指導を計画的に実施するために、在籍校の食に関する指導の全体計画と特別活動全体計画を作成した。さらに、食に関する全体計画に示した食に関する指導目標は、手引に示されてい

る食に関する資質・能力の3観点で設定した。その目標を具現化するために、6つの食育の視点に照らして、学活(2)-エの食に関する指導の題材を6カ年間の発達の段階に応じて示したのが、題材一覧(表1)であり、本研究における食に関するガイダンスの指導計画である。題材一覧は、6つの食育の視点を6カ年間で確実に学ぶことができるようにした。また、年間35時間(1年生は34時間)の中で、各学年3時間は食に関する学習ができるように計画した。また、各学年の題材は、基本的なものから複雑なものを学ぶように計画するとともに、3年生からは体育科保健領域の学習と、5,6年生は家庭科とも関連するように計画した。令和3年度は、この指導計画に沿って全校で食に関する指導を実施した。

表1 在籍校における食に関する指導題材一覧

食育に関する年間授業・題材計画(案)						
小学校用食育教材「たのしい食卓につながる食育」文部科学省より						
活動内容(2)「日常生活や学習への適応及び健康安全」						
エ 食育の観点を踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成 年間3時間						
	①食事の重要性	②心身の健康	③食品を選択する能力	④感謝の心	⑤社会性	⑥食文化
1年生	給食がはじまるよ			食事をおいしくするまほうの言葉	みんなで食べるとおいしいね	
2年生		元気のもと朝ごはん〜季節・地域を大切に	あやつの食べ方			食べ物「旬」
3年生	好き嫌いについて	自分の生活リズム			マナーの大切さ	
4年生			元気が削げる必要のない食事	食べ物が届くまで(社会科)		地域に伝わる行事食
5年生	食べ物の栄養				食べ物はどこから	日本の食文化
6年生	食事と健康		バイキング給食にチャレンジ	お世話になった人へ感謝を伝えよう(総合)		食べ物から世界を

(4) 結果と考察

予備研究において、在籍校で食に関する指導が持続可能な取組となるように題材一覧を作成した。また、それに沿った意図的・計画的な指導で、食育の6つの視点を小学校6年間で系統的に指導するカリキュラムを設定することができた。現在は題材一覧を参考に、食に関する指導の年間指導計画を作成し、食育の6つの視点を小学校6年間で確実に学ぶことができるようにしている。また、管理職と栄養教諭、学級担任を対象に、文部科学省(2017)「栄養教諭を中核としたこれからの学校の食育」(以下、学校の食育)に示されている活動指標による評価(以下、活動指標評価)を実施した。結果として、「食に関する指導が推進され、機能しているか」という4件法による評価への回答が3.8だった。また、児童に関しても「食に関心がある」と回答した児童の割合が実施前78%から実施後90%に向上した。

このような結果から、食に関する指導を指導計画に沿って意図的・計画的に実施することができるように整備したことは、食に関する指導の推進を指導者が実感することや児童の食育への関心を

向上させる上で有効だと考えた。今後は児童が望ましい食習慣を形成するための自主的・実践的な指導や行動変容に向けた支援の在り方を明らかにすることが求められる。

3 研究 I

(1) 目的

健康課題を解決する上で学活(2)-エの主に集団の場面における食育ガイダンスの効果的な在り方を授業改善の視点を基に効果を検証し、明らかにする。

(2) 研究方法

期間 2020年6月～2020年12月

対象 在籍校第4学年児童(37名)

実施計画

児童の自主的・実践的な学習を実現するために以下の視点で食育ガイダンスを実施した。測定内容は、授業改善の視点を踏まえた学習過程が自主的・実践的な授業展開になっていたか、また、食に関する自己指導能力が形成されたかを検証する。測定方法として資質・能力の3観点を踏まえた児童を対象とした質問紙を使用する。授業者と参観者の立場から、福岡県教育センター(2014)「授業診断ツール」を活用し、児童の授業への「参加・集中度」の変容を報告者と参観者でチェックを行い、結果を分析する。また、学校全体における食育の6つの視点に関する児童の意識の変容を児童への質問紙を実施し、昨年度の結果と比較して効果を検証する。

(3) 実施の具体的内容

視点1 未来志向型学習過程の実践

食育ガイダンスにおいては、これまでの食に関する指導の課題を踏まえ、授業改善の視点として、次の二点を設定した。一点目は、できていない原因を追究するだけでなく、理想の自分を設定し、未来志向で自己改善を図る意識を大切にすることである。二点目は、できていない自分に着目するだけでなく、これまでの自己のよさや頑張りを把握し、未来志向でさらによりよくしようという意

表2 未来志向型学習過程表

段階	ねらい	児童の姿
つかむ	ゴール像の意識化・共通化	よりよい生活に向けて頑張っていることを出し合い、さらによりよい生活をつくらうとする本時学習のめあてをつかむ段階
出し合う	現在の取組の紹介	よりよい生活するために、今具体的に努力していることを出し合う段階
話し合う	よりよい解決方法の共有	これまでの取り組みをふり返り、見つけた解決策や調べてわかった解決策などを話し合う段階
決める	行動目標の意思決定	話し合う段階を受け、気づいた改善策を意思決定し、行動につなぐ段階

識の流れを重視することである。また、SDGsの考え方を踏まえ、今後の学活(2)-エの授業では、何かをやらされているという受け身の姿勢ではなく、「何をしたらいいんだろう?」「自分にはどんなことができるかな?」と思考して、行動することができる児童の育成が重要であると考えた。そこで、学活(2)-エにおける未来志向型学習過程(脇田, 2020)を参考に指導のねらいをもって実践を行った(表2)。

視点2 児童の創造的思考及び批判的思考を深める発問の工夫

上記の未来志向型学習過程のねらいを達成するための手立てとして、児童の創造的思考及び批判的思考を深める発問を各学習段階に位置づけた。創造的思考とは、与えられた条件から多様な考えを生み出す思考である。また、批判的思考とは、問題に対して自分自身の取組や学習内容について内省する思考である。授業導入のつかむ段階では、題材の意義や価値を問い返す批判的思考を促す発問を行い、児童の題材を学ぶ意義や価値の理解が深まることをねらった。また、解決策を話し合う段階では、創造的思考を促す発問を行い、多様な考えを交流させることをねらった。自分の行動目標を意思決定する決める段階では、「自分の課題に合っているか」や「自分には難しすぎたり簡単すぎたりしないか」という一人ひとりの児童の自己理解に基づいて、段階的に目標設定するように指導した。

(4) 結果と考察

在籍校において作成した食に関する資質・能力に準じた児童による自己評価を事前・授業後(当日)・事後(1週間後)の3回実施した(図1)。

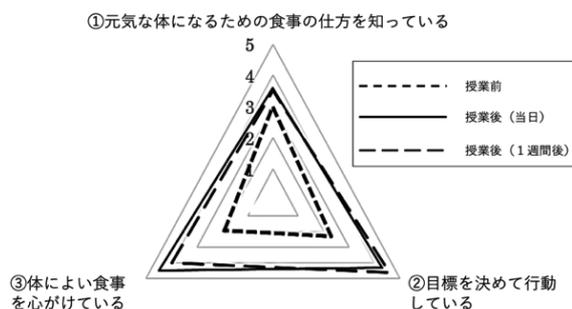


図1 食に関する資質・能力に関する質問紙における児童の自己評価の変容

授業前から授業後にかけて、児童の自己評価が向上していた。特に授業後の変化が顕著であった。また、学習過程の効果は「授業診断ツール」(福岡県教育センター, 2014)を用いて、授業を観察し

て分析した(図2)。手続は、観察法を用いて4人の参観者が個々に児童の授業参加・集中度を5分ごとに5段階で評価した。授業の参加集中度とは、発問に対する挙手率と教師の指示・説明、友達の発言への反応を総合的に評価したものである。発問を工夫した段階(25分及び40分)で、4人の参観者が参加・集中度が向上していると捉えた。

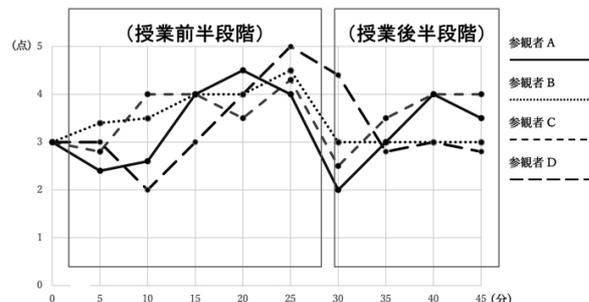


図2 学習過程ごとの参加・集中度の変容 (参観者4名の授業観察)

このような結果から、報告者が実践した未来志向型学習過程の実施や発問の工夫に沿った食育ガイダンスは、児童の食に関する資質・能力が高まったと児童が実感する上で効果的だったと考える。さらに、発問の工夫を行った段階で、参観者が児童の学習が促進されていたと感じたことを示していることから、自主的・実践的な学習に向けて一定の効果があつたと考える。

しかし、授業後の食育カウンセリング場面においては、意思決定した目標が簡単すぎたり、難しすぎたりして実践意欲を継続できない児童がいつという課題が残った。そこで、研究Ⅱでは食育カウンセリング場面における自己指導能力を育成するための効果的な支援を明らかにすることが求められる。

4 研究Ⅱ

(1) 目的

食育カウンセリングにおいて、健康課題に関する自己指導能力が育成される行動変容に有効な支援の在り方を明らかにすること。

(2) 研究方法

期間 2021年5月～2021年7月

対象 在籍校第3学年2組児童(22名)

実施計画

食育カウンセリングを通して、食育ガイダンスで意思決定した行動目標に沿った行動変容につながる支援を以下の視点で行う。

(3) 実施の具体的内容

視点1 実践途中で達成状況をふり返り、目標を修正する支援

食育ガイダンスにおいて意思決定した行動目標を実践する過程で行う食育カウンセリングでは、学習カードに目標の達成状況を記録させた結果を一週間の実践過程の前半3日間が終了した段階で振り返りの場を設定した。3日間とも目標を達成できた児童は22名中20名であった。これらの児童については、目標の難易度を上げたり項目を増やしたりするカウンセリングを行なって実践過程の後半につなぐ。これらの児童については、順調に実践が進んでいると判断し、基本的に見守る支援を行うことを担任と確認した。

視点2 スクリーニングで抽出した児童へのカウンセリング

22名の児童の内、事前アンケートで自己評価が低かった児童2名（抽出児童A、B）と達成状況のふり返りで目標達成に近づいていないと自己評価した児童2名（抽出児童C、D）には担任と連携して表3に示すカウンセリングの内容を、それぞれの児童の達成状況に応じて行った。

表3 抽出児童への支援の具体

抽出児童	抽出根拠	支援場面	食育カウンセリングの内容
A	事前アンケート	実践場面	・目標の意義を価値づける声かけ ・実践への励まし
B			
C	目標の達成状況	目標修正場面	・自己決定による目標修正の支援 (難易度を下げる、継続する等)
D			

実践後、児童のふり返りの記述を集計し、「AIテキストマイニング」(User Local社)で、出現頻度とスコアの高い名詞と動詞に分類した(表4)。

表4 児童の振り返りにおける単語の出現頻度とスコアの結果

名詞	出現頻度(回)	スコア	動詞	出現頻度(回)	スコア
感謝	18	4.27	食べる	24	0.91
気持ち	13	0.76	できる	21	0.56
目標	7	1.24	表せる	7	2.06

AIテキストマイニング (User Local社)

スコアとは、文章中でその単語がどれだけ特徴的か表すものである。その結果、出現回数が多いのは、「感謝」という単語であり、本題材で取り扱った食育の視点に関連する内容だった。動詞では、「食べる」という単語であり、具体的な行動目標に関わるものであった。スコアが高かったのは、出現頻度も高かった「感謝」と本題材の視点(感謝の心)と関連の深い「表せる」という単語だった。また、個別に支援した抽出児童の振り返り記述(表5)には、実践を肯定的に捉えている様子が見えてきた。

表5 実践後の抽出児童の振り返り

抽出児童	ふり返りの記述
A	この活動をして、感謝の気持ちを表すことができました。はじめは、あまり表せなかったけど、今はしっかり表せます。
B	感謝の気持ちで「いただきます」が言えるようになったのでよかったです。
C	この学習をして、はじめは目標をあまりできなかったけど、今は少しずつできるようになっています。これからもがんばりたいと思いました。
D	はじめは目標をできなかったけど、今はまあまあできるようになったからうれいです。

(4) 結果と考察

このような結果から、報告者が実施した食育カウンセリングは、すべての児童が自主的に実践を継続することをうながすとともに、個別に支援が必要な児童に対しても、自身の行動変容を実感させる上で効果的だったと考える。

しかし、今後はこのような食に関する指導を汎化させるために、学校全体に拡充していくことが求められる。

5 研究Ⅲ

(1) 目的

報告者が食に関する指導に関して栄養教諭へのコンサルテーションを行うことで、栄養教諭を中心とした校内食育推進体制を充実させること。

(2) 研究方法

期間 2021年7月～2021年12月

対象 栄養教諭、学級担任及び全校児童

実施計画

研究Ⅰ・Ⅱにおいて報告者が実践して効果的だったと考える食育ガイダンスと食育カウンセリングについて、研究Ⅲでは各学級担任が実施できるように栄養教諭から情報提供ができるようにした。

「学校の食育」では、栄養教諭は学校における食育推進コーディネーターとして、その職務の中(図3)で教職員や家庭・地域との連携を図りながら、食に関する指導と学校給食の管理を一体のものとして行うことにより、教育上高い相乗効果をもたらすと示されており、学校の食育は栄養教諭を中核として推進していくことが重要だと考えた。

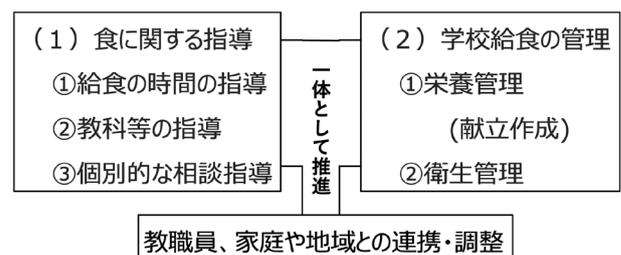


図3 栄養教諭の職務

しかし、食に関する指導の実施に関しては、経済面や家庭のプライバシーにもつながる部分が多い。つまり、栄養教諭よりも学級担任の方が児童の実態を把握しているため、学級担任が食に関する指導の主体となり、それを栄養教諭が支援する体制がふさわしいと考えた。そこで、報告者は栄養教諭に対して、その職務の中の食に関する指導のうち特に「教科等の指導」に関する食育ガイダンスと食育カウンセリングを以下の視点でコンサルテーションを実施した。栄養教諭から担任への情報発信ができるようにすることを通して、学級担任が実施する食に関する指導を充実していくことを目指した(図4)。た、持続可能な食育の推進につなげるために栄養教諭や学級担任が活用できる授業作りへの情報提供ツールを作成した。

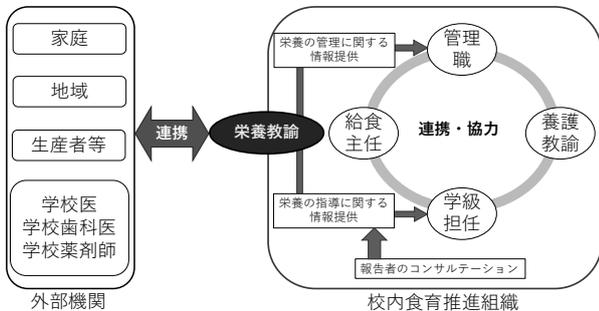


図4 栄養教諭を中心とした在籍校の食育推進組織

(3)実践の具体的内容

視点1 食に関する指導の活動指標を活用したアセスメント

①児童の食に関する資質・能力の実態把握

在籍校の全校児童を対象に実施した「生活習慣・食生活アンケート」の結果を集計した。その結果として、昨年度と比較すると「食育の6つの視点」の全ての項目で得点が上昇していた。しかし、具体的な目標設定をすることやそれを実践する事に関する設問では、他の設問に比べ得点が低いという結果だった。

②栄養教諭の食に関する指導の実態把握

在籍校には2名の栄養教諭(A, B)が配置されており、校内の食育推進の役割を担っている。Aは経験年数20年のベテラン教諭であり、Bは経験年数2年目の若年教員である。Aは校内に留まらず町内の小中学校の食育の推進にも寄与している。BはAから栄養教諭の職務に関するコンサルテーションを受けている。しかし、Aは栄養教諭の職務に関するコンサルテーションのうち、食に関する指導の中で特に「教科等の指導」に関しては、その指導法についてなかなかコンサルテーションができていないと感じており、Bも食に関する授業について、授業設計をすることに課題を感じていることが明らかになった。

③学級担任の食に関する指導の実態把握

在籍校の学級担任に食に関する指導に関するアンケートを実施した。アンケートの結果から、在籍校においては、特に経験年数が低い教員が食に関する指導の自己評価が低い傾向にあることがわかった。さらに、記述式には、「授業作りの仕方が知りたい」や「自分にあった目標設定のさせ方が知りたい」、「授業後の実践がうまくいかない」という回答が多く、授業の計画段階や目標設定と実践過程に課題を感じていることがわかった。

視点2 栄養教諭に対する食に関する指導の実践に関する支援

①一連の活動の計画段階における支援

アセスメントにおいて栄養教諭や学級担任の課題意識が高かった食に関する指導の計画段階で「食育プランニングシート(脇田 2019)」を活用して構想するように栄養教諭に助言した(図5)。「食育プランニングシート」は、学活(2)-エの一連の学習過程を見通すことができるようにまとめられている。

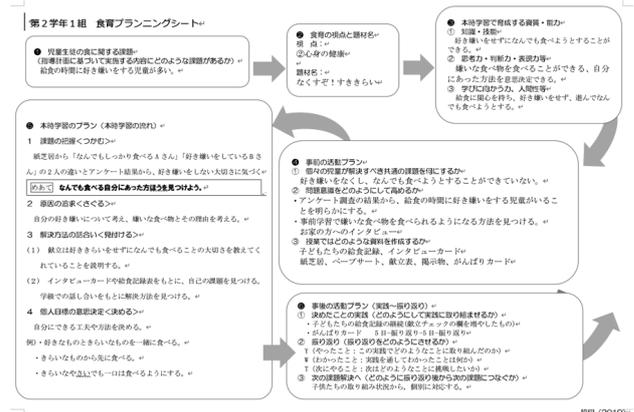


図5 食育プランニングシート(脇田, 2019)

②意思決定と実践過程における支援

児童の課題意識が高かった意思決定場面と実践過程に関するコンサルテーションとして、食育プランニングシートによる授業設計ができた段階で、児童が自己理解に基づく意思決定をすることができるように佐賀教育センター(2017)を参考にした「バウンダリーワークの考え方を生かした学習カード」を報告者から栄養教諭に提示した。バウンダリーワークとは、境界線引きという意味であり、今回は「今できていること」と「少しがんばればできること」、「かなりがんばればできること」を自己理解するための考え方として活用した。学習カードには、「今できていること」「少し頑張ればできること」「かなり頑張ればできること」と段階的に目標を設定することができるように作成していることを伝え、報告者が実施した授業で活用し

た具体物を提示して、自己理解に基づき段階的に目標設定する意思決定になるように助言した（表6）。実践の過程では、実践の途中で達成状況の振り返る場を設定できるように学級担任と確認することと振り返りの場では、その結果をもとにその後の目標を児童が付加修正できるようにすることを助言した。また、その際は段階的に目標設定した学習カードを活用して、自己評価に基づき少し難しい目標にしたり、できていることを継続したりする一人ひとりの児童が自分にあった目標になるように支援することを助言した。

表6 バウンダリーワークの考え方をを用いた児童の目標設定の例

	例1	例2
今できてい	静かに食べること	手を洗って仕事をする
ること		
少し頑張れ	味わいながら食べる	もうちょっと丁寧に手を
ばできること	こと	洗う
かなり	調理員さんに合った	野菜を減らさずに食べる
頑張れば	ら「ありがとうございます	
できること	ます」と言う	

③地場産物や生産者の協力を得た授業作りへの情報提供

在籍校の属する自治体では、地産地消プロジェクトの応援サイトが運営されている。サイト内には、毎日の学校給食を献立と写真や自治体のブランド米等の生産過程や生産者のこだわりや願い等が掲載されている。また、サイトを運営している産業振興課に取材をすると、地域の生産者とのパイプ役を担っており、生産者と学校をつなぐために協力してもらえるとということだった。このような情報を栄養教諭に提供し、教科等で食に関する指導を実施する際に学級担任に紹介することができるようにした。

また、持続可能な食育推進を目指すためのツールとして、これまでの研究の成果や指導案集等を一覧できる食育情報サイト（Google サイト）を作成した。このサイトは随時情報を更新することが可能であるため、実施した食に関する指導実践を蓄積していくこともできる。モバイルやパソコン向けにサイトが自動的に最適化されるため、どのデバイスからでも閲覧しやすいため、閲覧者が食育に関する情報をいつでも必要なときに必要な内容を閲覧することができる。

(4) 結果と考察

予備研究において食に関する指導を意図的・計画的に実施する計画を整備した。それを土台とし

て、研究ⅠⅡで効果的だった食育ガイダンスと食育カウンセリングを栄養教諭へのコンサルテーションを通して、各学級担任が効果的な食に関する指導を実施できるようにした。また、持続可能な食育の推進を目指して食育情報サイトを作成した（図6）。

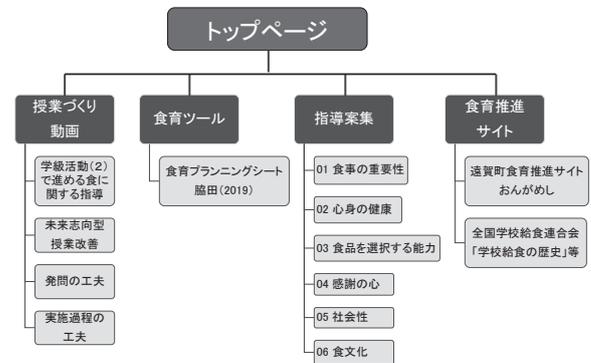


図6 食育情報サイトの構成

①児童の食に関する意識調査から

在籍校で全校児童に実施している食生活アンケート（四件法）の結果を平均し、食育の6つの視点に基づき分類した結果が図7である。

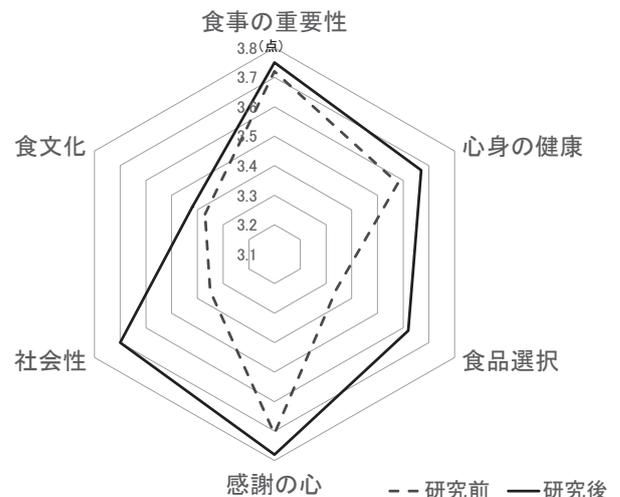


図7 研究前後の在籍校児童に実施した食生活アンケートの結果

全ての項目で研究前に比べて研究後の得点が向上していた。特に、「社会性」と「食品選択」の項目の向上が顕著であった。「食文化」に関しては他の設問と比較すると得点が低かった。

②栄養教諭及び学級担任の活動指標評価から

栄養教諭へのコンサルテーション後に栄養教諭と学級担任に実施した活動指標評価（四件法）の結果は表7の通りだった。

区分別で最も評価が高かったのは、「食に関する指導の計画的な実施」に関する項目と「栄養教諭

と学級担任の連携」に関する項目だった。評価が低かったのは、「授業評価」に関する内容と「外部機関と連携協力した食育の推進」に関する内容だった。

表7 栄養教諭及び学級担任の活動指標評価の結果

区分	評価指標	評価 (min:1,max:4)
食に関する指導内容	教科・特別活動等における食に関する指導が推進され、機能しているか。	3.2 (3.0)
	□栄養教諭が計画通り授業参画できたか。	3.8 (3.5)
	□教科等(学級活動)の目標に準じ授業を行い、評価規準により評価できたか。	2.7 (2.5)
	□教科等(学級活動)の学習内容に「食育の視点」を位置付けることができたか。	3.4 (3.5)
連携・協力	教師同士の連携体制が構築され、食に関する指導が行われているか。	2.7 (3.0)
	□栄養教諭は養護教諭、学級担任等と連携して指導できたか。	3.8 (3.5)
	□栄養教諭を中心として、家庭や地域、生産者等と連携を図った指導ができたか。	2.2 (2.0)

網掛の数値:学級担任9名の平均、()内の数値:栄養教諭2名の平均

③食育情報サイトに対する質問紙調査から

上記の活動指標評価と同時に在籍校職員に実施した食育情報サイトに関する質問紙調査の結果は以下の表8の通りだった。肯定的な感想が多かったものの、食育に関する他教科及び領域の情報や児童向けの情報サイトとしても活用したという要望もあった。

表8 食育情報サイトに関する質問紙調査の結果

分類	主な回答
感想	・食育の授業の進め方がよくわかった。特に指導案集は参考になる。 ・外部との連携を図っていききたいと思えた。 ・データを蓄積していけるので、年々充実したものになると思う。
要望	・学活以外の教科についても情報がほしい。 ・子供たち向けの情報があると調べ学習に活用できる。

④研究Ⅲの考察

以上、研究Ⅲの結果から、報告者が栄養教諭に実施したコンサルテーションは、児童の食に関する肯定的な変容を実感させるとともに、学級担任と栄養教諭が連携して指導を実施することにつながった。また、持続可能な食育推進を目指すための食育情報サイトに関しては、実践につながる肯定的な回答がうかがえ、今後の食育の推進の一助になると考察した。

しかし、コロナ禍の影響もあり外部機関と連携した取組には課題が残った。また、食生活アンケートで得点が低かった「食文化」は他教科等との関連が深い視点である。今後さらに食育の推進を図っていくためには、学活(2)-エだけではなく、教科横断的な視点で食に関する指導を実施していくことも求められる。

6 総合考察

本研究で実施した食育ガイダンスでは、児童が健康課題に関する自身の行動目標を自己理解に基づき意思決定することができた。食育カウンセリングでは、児童が意思決定した行動目標を達成状況に応じて実践することができた。これらのことから、本研究は、児童の健康課題に関する自己指導能力を育成する上で一定の効果があったと考察する。しかし、食に関する指導の教科横断的な実施には課題が残った。このことは、児童が他教科等で学んだことを活用して、自己指導能力の育成を目指す食をテーマとするカリキュラム・マネジメントの充実を示唆するものであると考えた。

また、教職大学院学中の実習として訪問した児童養護施設の施設長は親元を離れた子供たちの心の安定を図るために食事を充実させていると説明された。学校においても、食育を通して目指す児童の姿を明確に設定し、本研究のように食育推進体制を中心にその具現化を図っていく姿勢を今後も大切にしたい。今後は、食育情報サイトを中心に食に関する指導の実践や他教科等の情報を発信していき食育のさらなる推進に寄与していきたい。

主な引用・参考文献

- 厚生労働省 2018 国民健康・栄養調査
 坂本昇一 1990 生徒指導の機能と方法 文教書院
 文部科学省 2010 生徒指導提要 日本図書
 文部科学省 2019 食に関する指導の手引—第二次改訂版— 健学社
 農林水産省 2021 第4次食育推進基本計画
 杉田洋 編著 2017 平成29年度版 小学校新学習指導要領ポイント総整理特別活動 東洋館出版社

謝辞

本研究に際し、機会を提供してくださった福岡県教育委員会及び北九州教育事務所、遠賀町教育委員会、また、在籍校や協力校の校長先生をはじめ、ご協力していただいた全ての先生方に、心より感謝申し上げます。